「日々の理科」（第 1941 号）　2019,11,-1

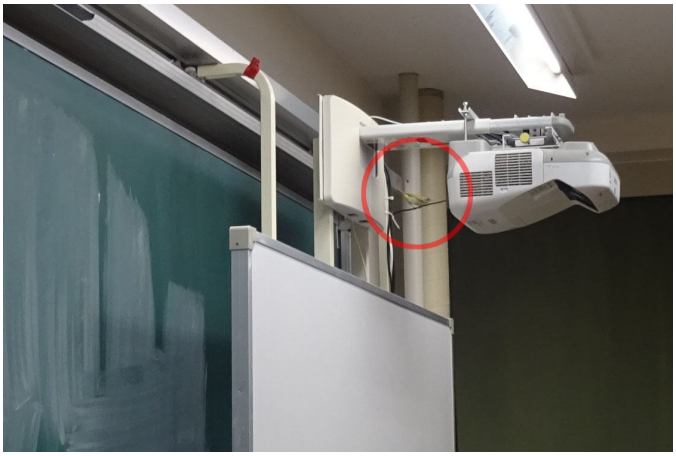
「理科室に迷い込んだ野鳥（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

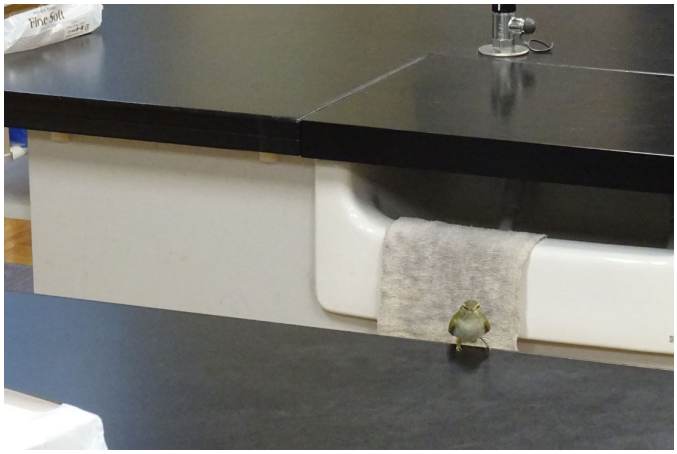
田中　千尋　Chihiro Tanaka

本校は大学構内の比較的緑が豊かな環境にあるので、野鳥も多い。時にはその野鳥が校舎内に迷い込んでくることもある。

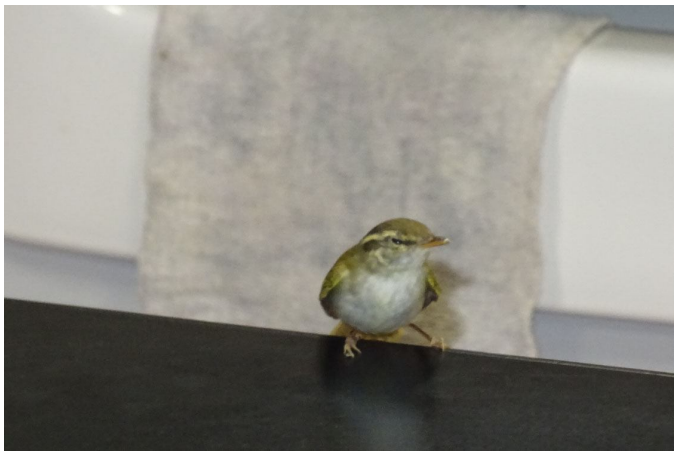


先日の朝、理科室（実験観察室）で、水溶液の授業の準備をしようと入ったら、天井付近を「何者か」が飛んだ。最初は蝶か蛾かコウモリか、あるいは心霊現象かわからなかった。しかし、電子黒板のコードに止まって、小鳥だとわかった。本校ではどのクラスでも小鳥は飼育していないので、これは野鳥が迷い込んだものである。

小鳥は私の気配に警戒し、あちこち逃げ回っている。これは古いぞうきん掛けに止まったところ。このぞうきん掛け、本校では最も古いもので、備品ラベルには「東京女子高等師範」と書いてある。少なくとも 70 年以上前の骨董的な価値があるものだが、今でも現役の備品で、ぞうきん掛けとして使われている。



今度は、児童用の実験卓にとまっている。自然環境では、樹木の小枝などに止まるのだろうが、人工物の多い実験室ではどうも勝手がちがうようで、戸惑ってキョロキョロしている様子だ。



全体的には渋い緑色の野鳥のようだ。メジロにも似ているが、目の特徴がちがう。カワラヒワにしては緑が濃い。くちばしはゴジュウカラにも似ている。

実験道具を運ぶワゴンにとまって、背中や顔の羽色の特徴がよくわかった。これは「センダイムシクイ」という野鳥である。最大の特徴は、目の上から頭の後ろまで伸びる白い筋である。センダイムシクイは渡り鳥だ。どうしてこんなところに迷い込んだのだろう。